明治時代の早稲田大学野球部と応援に関する一考察

The Study of Waseda University Baseball Team and Cheering in Meiji Era

1K08B037-1 宇都宮英恵
指導教員　主査　友添秀則先生　副査　深見英一郎先生

第 1 章

早稲田と慶應が野球部を持てるようになるまでの史的変遷について、当時の学生野球界と並行して明らかにする。野球は明治 6 年に、アメリカ人教師を通じて、日本の大南学校に伝わり、「一高」と呼ばれた強豪・第一高等学校や慶應義塾大学、学習院などに広まり、学生を中心に親しまれることになった。早稲田と慶應では、学校創設の時期からして慶應の方が早く、クラブ結成など学生が野球を始めるのも早かった。早稲田は明治 15 年に東京専門学校として誕生するが、政治色が強く、またバンカラな学風が強かったため、「清新さ」「ハイカラさ」の象徴であった野球が早稲田の学生に親しまれるためには、早稲田大学となる明治 34 年まで 19 年もの時間を要した。

第 2 章

早稲田大学野球部初代部長である安部磯雄と、早稲田大学野球部発足について明らかにする。藩士の家に生まれた安部は、明治維新のなかで貧しさを経験する。同志社に学んだ安部は、クリスチャンになり平和主義に目覚めると同時に、社会問題、特に貧困問題を解決したいと願うようになる。同志社を卒業したのちは、アメリカの神学校に留学し、彼は貧乏という社会問題を解決するためには社会主義が良いという結論に達し、以降社会主義者としての道を歩み始める。アメリカ留学ののち、今度は宗教的な研究を行うべく、安部はベルリンへ留学を決意する。その道中、イギリスに滞在し、国際的な運動競技の存在を知った。試合の結果には興味を示さなかったものの、「国際平和を通して人類の幸福促進に貢献したい」と考えていた安部は、そのツールとして国際運動競技をとらえ、「日本の学生にも行わせたい」と強く思うようになった。これが後に早稲田大学野球部のために尽力し、アメリカ遠征を行わせるきっかけとなった。日本に帰国した安部は、再び同志社で教鞭をとるが、学内の争いに巻き込まれ同志社をやめ、東京専門学校に来る。早稲田は、東京専門学校から早稲田大学になるにあたり、ようやく「清新さ」「ハイカラさ」を受け入れる準備が整い、中学で野球をしていた少年たちが入学してきたため、これまで根付かなかった野球も、早稲田に根付くようになる。早稲田で教師をしていた安部は野球部のためグラウンドの土地を得るなど奔走する。実力者がそろい、さらに専用グラウンドの出来た早稲田大学野球部は、次なる目標を「日本一、そしてアメリカ遠征」と定めたのであった。安部の、国際運動競技を通して「国際平和」を実現するという夢が実現に向かっていた。

第 3 章

アメリカ遠征のため、まずは全勝して日本一になることが目標であった。外国人チームの横浜アマチュア倶楽部に勝った野球部は、慶應に試合を申し込み、第 1 回の早慶戦を行った。結果は早稲田の負けであったが、これをきっかけに野球早慶戦が定期的に行われることになった。翌年、安部は野球部を強くするために、本場アメリカで鳴らした人物をコーチに引っ張ってきた。そして、学習院、次いで早慶が相次いで王座一高を破ると、時代は早慶の覇権争いとなり、第 2 回の早慶戦は野球部のみならず学生中の注目を集めた。早稲田は慶應に勝利し、「全勝無敗の日本一」を決め、アメリカ遠征を実現のものとする。野球部がアメリカ遠征をおこなったことで、日本野球の応援方法にも変化が現れた。安部は、アメリカで見たリーダーが音頭をとり観客を指揮する「カレッジ・エール」と「組織的集団応援」方法に感銘を受け、吉田信敬を通して応援隊を結成させると、これらの「整然とした」応援方法を用いて早慶戦を盛り上げた。しかし、翌年の早慶戦からは、整然とした応援は影をひそめ、早慶両校の応援隊が中心となった劣悪な彌次の飛ばしあい合戦が始まった。そして、試合を続行することままならぬと考えた慶應義塾大学塾長兼田と、早稲田側の安部は、早慶戦の中止を宣言、以降 20 年にわたり早慶戦は行われず、大正 14 年に再開されるまで、応援も禁止されることとなった。

結章

以上の点から、早稲田大学野球部が存在するのは、安部の尽力によるところが大きい。安部が貧しい環境を経験していなければ、社会学者としての彼は生まれなかったであろうし、安部が同志社に行かなければ、彼がクリスチャンとなって海外留学を経験することもなかった。海外留学をすることもなければ、国際平和を願うだけの国際感覚を会得することもなかったであろうし、オックスフォード大学とエール大学の国際運動競技を目にして日本の学生にも行わせたい、などと思うこともなかったであろう。このように、安部が経験したことのすべては、やがては早稲田大学野球部結成につながり、早慶戦の歴史をつくり、早稲田大学応援部や全国の応援団体が使用する「エール」の輸入につながっていくのである。